まえがき

本書は、二〇世紀世界史におけるアメリカ合衆国（以下、アメリカ）の存在を、アメリカと出会い、関わった諸国・地域の人々が、それぞれの営みのなかでどのように捉えてきたのかという視点から検討を試みた論集である。したがってここで考えようとしている「アメリカ体験」とは、アメリカを訪れた者の体験というよりは（そのような側面が扱われていないわけではないが）、むしろ、アメリカが訪れた地域の人々が、来訪者としてのアメリカとの関わりをどのように体験したのかという問題である。そして、そのような意味での「アメリカ体験」の検討を通して、本書は、「世界史的存在としてのアメリカ」の歴史像をめぐる議論のひとつの呼び水になることをめざしている。以下、そのねらいを簡単に述べておこう。

二〇世紀世界史におけるアメリカの影響力の巨大さに異論を挟む者は少ないだろう。二〇世紀のアメリカは、一九世紀までの世界史を動かしてきた諸帝国、たとえばローマ帝国、中華諸帝国、イスラム諸帝国、スペイン帝国、イギリス帝国、そして、「短い二〇世紀（一九一七―八九）」の二極構造を共に担ったソ連などと並んで、間違いなく世界史的存在である。そして、二〇世紀世界におけるアメリカの中心性は、世界システム論に代表される世界資本主義の構造分析や国際関係の諸理論などにおいてすでに幅広く検討されてきたし、二〇世紀の国際秩序や世界諸地域の政治・経済・文化的編成に対するアメリカの影響力の行使は、国際関係史研究の主要な研究主題であり続けてきた。しかし、これら従前の研究をもって歴史学が「世界史的存在としてのアメリカ」を十分に論じてきたとは必ずしも言えない。世界資本主義のなかでいかにしてアメリカが中心性を獲得したかという問題は、たとえそこで中心と周辺関係や周辺の状況が正しく位置づけられたとしても、主題の設定自体に「一国史」アメリカ中心の視座の制約が内在している。また、地域との関係を論じる点では「一国史を超えた課題を設定する国際関係史の場合でも、圧倒的に豊富なアメリカ側の公開文書への依存は、ともすればアメリカの側にさまざまな歴史過程の主體的契機を見出し、地域を客体として描くアメリカ中心のな見方に歴史像を傾かせてきた。

これに対して、過去の諸帝国とならぶ「世界史的存在」としてアメリカを捉えようとするのならば、アメリカ史やアメリカ中心の国際関係史を超えて、たとえば日本の国家生成史における中華諸帝国の存在、あるいは南北アメリカ社会の生成史におけるヨーロッパ諸帝国の存在を論じるように、世界諸地域の国家と社会そして人々が営んだ二〇世紀史の文脈のなかにアメリカの存在がどのように織り込まれてきたのかが検討されなければならないだろう。そこで必要なのは、アメリカが影響を及ぼし、あるいは働きかけようとした対象地域とそこに人々を何らかの意味で主体として分析する視点である。もちろんここで言う主体とは、親米派エリート、反米民族主義者などアメリカに対して一貫した実体化しやしない態度をとる集団ばかりを意味するわけではなく、むしろ介入・浸透するアメリカという存在やアメリカが発信する情報や規範を、それぞれが生きる歴史の営みのなかに織り込んで、

時宜に応じて抵抗・利用したり、読み替えたりするなど、アメリカの存在に対して融通無碍な対応を示してきた人々のあり方を含んでいなければならぬだろう。

いずれにせよ、このように「働きかけられる客体」とばかりみなされがちであった地域や人々を「生きる主体」として捉えなおすためには、地域史の側からアメリカの存在を照らし出し、両者の関係を相互浸透的に理解する作業が不可欠となる。この点、植民地状況をめぐる歴史理論や他者認識論の進展にともなつて、たとえばイギリス帝国史や人類学における歴史研究などでは、宗主国と植民地を対象とする研究者が活発に交流・融合して、まさに世界的な視野での研究の可能性が広がり始めている。これに対して、公式の植民地支配を通じて地域と結びつくことが少なかったアメリカの場合、それぞれの地域史とアメリカ史が交流する機会はまだ限られており、植民地状況をめぐる視点や方法が、はたしてアメリカをめぐる国際関係史に応用可能なかどうかも、まだ議論される以前の段階にとどまっている。

したがって、「世界史的存在としてのアメリカ」の歴史像に迫るためにまず必要なことは、アメリカ史と地域史が活発に対話することであろう。とりわけ二〇世紀の半ばに戦争による直接対決、戦後の占領というかたちでアメリカと劇的に結びつき、世紀末に向けて世界史上でも稀な相互に依存する巨大な市場経済を編成するに至った日本において、アメリカ史と地域史を結ぶ視点を編み出すことは歴史学のすぐれて現代的な課題でもある。そこで本書では、あえてアメリカ以外の地域を主たる研究対象とする歴史研究者の皆さんを中心として、二〇世紀アメリカの世界史上の意味を、その関与・支配の対象地域、あるいはアメリカを体験した地域の視点から縦横に論じていただくことを企画した。その意味で本書は、「世界史的存在としてのアメリカ」の歴史像そのものについて何か結論めいたものを提示するというよりは、ひとつの問題提起として、個別の地域史の視点から多様な「アメリカ体験」像を示そうとするものである。

本書のもとになつたのは、歴史学研究会一九九八年度大会・全体会「二〇世紀のアメリカ体験」である。同全体会では、本書にも寄稿した加藤哲郎・吉村慎太郎の両氏および本書の編集責任者(中野聡)が報告を行った『歴史学研究 一九九八年度大会特集号』七一九号、一九九八年一〇月。しかし本書は厳密な意味で一九九八年全体会の延長線上にあるわけではなく、加藤・吉村両氏には全体会の討論をふまえて新たに練り直した論考を寄せていただき、また、一〇名の新規執筆者の皆さんには「それぞれの地域史の視点から二〇世紀アメリカの意味を縦横に論じてほしい」という、いわば投網のようにして投げかけられた問いに対する自由で多様な答えの数々として、論考を執筆していただいた(余談になるが、予想を超える力作が集まり頁数も膨らんだため、編集責任者は喜んで原稿を取り下げさせていただいた。拙論は大会報告集をご覧いただきたい)。

こうして寄せられた諸論考は、必ずしも共通の視点や方法論を前提としているわけではない。アメリカについての捉え方も多様であり、その呼称(アメリカ、アメリカ合衆国、米国、アメリカなど)さえ、あえて統一していない。とはいえこれら一群の論考は、全

体として、「世界的存在としてのアメリカ」の歴史像を議論するうえで幾つかの重要な問題群を示している。本書には、それらの問題群別に、四部構成で論考が配列されている。

まず、第一部「敗戦国のアメリカ体験」には、戦後の日本人の身体性と「くらし」をめぐる意識の変化のなかに日本人のアメリカ体験を読み込む加藤哲郎氏の「戦後日本と『アメリカ』の影」、ソ連を後盾に国家建設が進められた(旧)東ドイツの戦後史のなかで育まれてきた公式・非公式のアメリカ像を追う木戸衛一氏の『ドル帝国主義』、インディアン映画、国産コーラ」、戦後アメリカ占領地域ドイツにおける非ナチ化政策不徹底の原因を、ドイツ人の側の非ナチ化に対する意識の変遷に注目して論じる深川美奈氏の「非ナチ化とドイツ人」を収めた。加藤・深川両氏の論考は、第二次世界大戦の敗戦国であるがゆえにアメリカとの関係史研究がこれまで最も進んできた国々に数えられる日本とドイツについてもすればアメリカを政治過程の主体として記述しがであった従前の占領史中心の対米関係史とは異なる視角からのアプローチを示している。また、冷戦構造のなかでソ連の勢力圏に組み込まれた(旧)東ドイツで、ドレスデン空襲に対する怒りなどアメリカを敵視する戦争の記憶が温存されたことを指摘した木戸氏の論考は、戦後日本との興味深い比較の視点を提供している。

第二部「国民国家形成とアメリカ体験」には、まず、それ自体がメキシコ国家の辺境であった北部国境地帯において、一九世紀末から二〇世紀はじめにかけて、隣接するアメリカが浸透する一方で両国間の差異化の圧力によりメキシコ化(国民国家化)が進んだ過程を論じる佐藤勲治氏の「浸透するアメリカ」、帝国主義支配が設定した国境線を超えた統一をめざすアラブ・ナシヨナリズムと、既成の主権国家間関係の枠組みを維持する中東諸国家システムの輻輳した関係のなかで、アラブ民衆が反米感情とアメリカへの憧れの交錯する複雑な心性を育んできた過程をヨルダン現代史のなかから論じる北沢義之氏の「アラブ・ナシヨナリズムにおけるアメリカ像」、そしてイランにおいてアメリカが「片思い」の対象から一九七九年イラン革命において最終的に「大悪魔」とされるまでの反米言説の形成史とそのイランの国家形成史における機能的解釈を提示した吉村慎太郎氏の「レジスタンスの中の“アメリカ”」を収めた。いずれもアメリカの存在を、二〇世紀の顕著な歴史現象であった非欧米地域における国民国家形成のプロセスに大きな影響を与えた主体としてだけでなく、国民国家形成史の文脈のなかに織り込まれていく存在として捉える視点の必要性和有効性を示している。

第三部「アジアのアメリカ体験」には、米朝修好通商条約締結(一八八二年)から日本の韓国保護化・併合、朝鮮統治の終焉にいたる時期のアメリカ・朝鮮(韓国)の関係史を論じる長田彰文氏の「日本の韓国併合・朝鮮統治とアメリカ」、アメリカとの密接な関係を政治資産として国民党の要職を歴任した宋子文が一九四〇年代に果たした役割を通じて中国の政治空間におけるアメリカの位置を論じる西村成雄氏の「一九四〇年代中国『親米派』のトリレンマ」、ベトナムが今日その二〇世紀最大の「アメリカ体験」であったベトナム戦争をどのように総括しようとしているのかを論じる古田元夫氏の「ベトナムにおけるベトナム戦争

の総括をめぐって」を収めた。アジアの民族主義とアメリカとの友好と敵対の二〇世紀史をめぐっては、アジアの側に民族の敵対者としてアメリカを描く旧来の「米帝」イメージが依然としてある一方、アメリカの側では、政府外交文書の「語り」に引きずられて、ともしれば、準備も期待もなく冷戦の論理の安易な適用から「アジアの泥沼」に巻き込まれたアメリカの悲劇が強調されがちである。これらの論考は、いずれもより高い水準の地域史の文脈からアメリカの存在を捉えなおすことで冷静なアジア・アメリカ関係史像を構築する道を示している。

第三部までとは異なり、アメリカ史研究者の皆さんに「二〇世紀世界とアメリカの『対話』」を論じていただいた第四部には、二〇世紀世界に対してアメリカから発信された最も重要な社会運動の理念のひとつであるフェミニズムがアメリカのなかで抱えてきた、白人優位主義や宗教的・性的少数者への無理解などの「闇」を論じる前田真理子氏の「アメリカン・フェミニズムの世紀」、アンケートから浮かび上がる日本人の疑似体験されたアメリカ人としてのハリウッド映画体験をアメリカ史研究者の視点から検討する岩本裕子氏の「日本人のハリウッド映画体験」、そして、アメリカに最も衝撃を与えた「世界体験」としてベトナム戦争の意味を「ソニミ虐殺」事件の記憶を蘇らせる関係者と市民の動きから論じる藤本博氏の「アメリカ合衆国の『世界体験』としてのベトナム戦争」を収めた。これらの論考は、今日、アメリカが発信する「グローバル・スタンダード」がアメリカ史に内在して抱える矛盾を見逃してはならないこと、その一方、アメリカが発信するメッセージが、そのアメリカ的な含意を研究者が「深読み」するようには世界の人々によって読まれてはいないこと、そして、アメリカ側における「世界体験」の一定の遺産として、決して多数派とは言えないとしても他者との共生を重視する積極的な「対話」の可能性をめざす動きが生まれていることを示している。

以上ごく簡単に紹介したように、ここに寄せられた論考の数々は、いずれも、今後、二〇世紀史における「世界的存在としてのアメリカ」の歴史像を検討するうえで欠かせない重要な論点を問題提起している。それぞれの専門領域とは必ずしも重ならない主題に対して刺激的な論考を寄せていただいた執筆者各位には深く感謝すると同時に、これらの諸論考が、幅広い世界的対話の呼び水になることを強く期待したい。

最後になるが、本企画を推進していただいた歴史学研究会と、遅れがちな編集作業に忍耐強くお付き合いいただいた青木書店の編集担当者・野田美奈子さんにも、心からお礼を申し上げます。

二〇〇一年三月

編集責任者・中野 聡